

# ゴルバチョフはモスクワ大学法学部学生だった

村田克己

(大東文化大学法学部教授)

## 1 序言

1985年3月11日、ソヴィエト共産党中央委員会総会は、ミハイル・セルゲビッチ・ゴルバチョフを八代目のソ連指導者に選んだ。1931年3月2日、54歳の誕生日を迎えたばかりの若い指導者であった。

それからのゴルバチョフ書記長の政治活動は目を見はるものがある。ゴルバチョフが打ち出した国内政治に対するグラスノスチ(情報公開, 公開性), ペレストロイカ(建て直し)外交政策におけるノーヴォエ・ムイシレーニエ(新しい思考)といった政治スローガンはロシア語のままでも日本でも通用している。ゴルバチョフの政治分析のキーワードとなっている。ゴルバチョフの次から次へ提起する問題攻勢にアメリカも受身の情勢である。もっともゴルバチョフ改革が何時まで続くか, 暗殺のデマが出たりする位で安定した情勢とは言えない。だがしかし, 欧米諸国の歓迎するソ連指導者の出現である。世界の平和の実現のためには, ゴルバチョフのペレストロイカの進行は望ましい。ところでゴルバチョフとは, どんな人物なのか, どのような人格形成をしてきた人物なのか, 経歴は如何と関心がもたれる。特に彼は青少年時代を如何に過してきたか, 大学教育にたずさわる者としては興味深い。二・三の著書で調べて見た。

利用した著書は次の通りである。

- ・クリスチヤン・シュミットニホイアー著, 朝日新聞社外報部訳「ゴルバチョフ—権力掌握までの道程と改革路線の行方—」
- ・タイム誌編著, 読売新聞社外報部訳「詳伝ゴルバチョフ—鉄の歯の改革者—」
- ・ダスコ・ドーダー著, 木村明生訳「影と噂—クレムリンが震憾した日—」TBSブリタニカ発行。

西ドイツやアメリカの著名なソ連研究ジャーナリストたちの著書で, ソ連内外のゴルバチョフと交流のあった人びととのインタビューがゴルバチョフの人柄を語ってくれる。以下, ゴルバチョフの青少年時代に焦点をあわせてみたい。

## 2 ゴルバチョフの少年時代

ソ連では指導者の個人来歴についての秘密を病的にまで隠す伝統のせいか、さすがベテランの共産圏通の報道員たちも容易に近づけず遠ざけられることがあったりして少年時代の詳細を知ることは困難な作業である。

ゴルバチョフは1931年3月2日生れ。ロシア共和国の南部、コーカサス山脈の北麓、スタプロポリ市から北西へ160キロ、クラスノグバルディースキー地区のプリヴォールノエ村(村名は自由の意味)が彼の故郷であり、農民であった。老いたる母はこの地を離れたがらず、ゴルバチョフは誕生日には毎年この村に訪れ母親孝行をしている。1939年、ゴルバチョフ8歳の頃からスースロフがスタプロポリの党指導者となっていた。独ソ戦争が始まり、11歳の頃はスタプロポリ市はナチスの占領下にあったがゴルバチョフの村がナチスの圧制下にあったかどうか、ゴルバチョフの記憶にどのようなことが残っているかなどははっきりしない。父はコンバインの運転をした農業技術者であった。第二次大戦で戦死したらしい。ゴルバチョフは祖父のもとで農作業に従事しコンバインの助手や運転もやったという。ゴルバチョフはソ連の青少年と同じように14歳から共産主義青年同盟(コムソモール)のメンバーになり共産党の指導の下に共産主義と愛国主義精神を教育され共産党と国家活動に積極的に参加するようになる。コムソモール員となるには厳格な資格審査をパスする必要があった。ゴルバチョフは義務教育の十年制学校(中等学校)を銀メダルで卒業するほど優秀な生徒であった。コムソモールを通じての諸活動にも率先して模範的青年共産党員として責務を果たしたので18歳の若さで珍らしく労働赤旗勲章を授与される高い評価をうけた。スタプロポリ地区共産党の高い評価を得たことがモスクワ大学入学への推薦をうけることになる。

勤勉なゴルバチョフの少年時代は石油ランプと堀立小屋の簡素な農民の生活だった。少年ゴルバチョフの思考様式の重要な要素となったのは祖先から受けついだ純粋ロシア人の愛国心で内面世界の根源となった。祖国ロシアへのこよなき愛国心をもった少年として学校教育、コムソモールの雰囲気の中で成長した。

## 3 モスクワ大学法学部学生となる

1950年9月、モスクワ大学法学部へゴルバチョフは入学した。19歳だった。ナチス軍のスタプロポリ地方占領が卒業を一年遅らせることになったのである。ゴルバチョフの第一志望は理学部だったようだ。法学部は出世指向のソ連の若者にとって第一に選択する分野ではなかった。ソ連では法律の仕事の権威が非常に低かった。マルクス・レーニン主義の教義の下で法概念そのものが遅れていた。特にスターリン時代のソ連法律家の実務は、二

千年の歴史を持つ西側の法学に比べようもなかった。スターリン独裁はただ一つの法律しか認めていなかった。独裁者の言葉がすべて法律であった。法学部卒業生のほとんどは、検事局あるいはKGB（国家保安委員会）に就職した。自尊心を持つ学生には魅力的な職業ではなかった。問題は恐るべきスターリン粛正の影響であろう。学問の対象として法律の評判が芳しくないことは50年代のソ連で学生数の少なさに表れている。学生総数120万人のうち法学部学生は僅か4万5千人だった。58年59年には法学部学生は3万6千人に減っていた。56年フルシチョフのスターリン批判があり社会の緊張がほぐれ始めたのに、当時の法律の役割りは大したことがなく、法学部は人気のある学部ではなかったのである。

法学部の不評にもかかわらずゴルバチョフはソ連最高の国立モスクワ大学に入学し一つの学問分野に引き入れられていった。幸い彼の強い政治的関心を磨き上げるのに大いに役立つことになった。ゴルバチョフが精神的にも知的にも寄りどころとし崇拝したソ連の国父レーニンが法学部卒業の弁護士であり、歴代指導者中唯一の大学卒業者であった。

法学部の学生は次の4つのグループに区分できた。第一は第二次大戦の復員学生たちである。8歳年上の陸軍大佐リーベルマンもその一人であった。第二は特権的な地位にある両親の子弟である。だがモスクワ、レニングラードなどの大都市からの入学は少数であった。第三のグループはゴルバチョフのような才能のある地方出身者たちである。第四のグループは少数であるが、第二次大戦後ソ連の支配下に入った東ヨーロッパの新しい共産主義国—ソ連式言い方では兄弟的社會主義諸国から選ばれた外国人留学生たちである。中国もふくまれる。外国人留学生たちは共産主義への固い信念をもち、帰国後、親ソ的なエリートになることが期待された若者たちだった。これらの学生の中にチェコスロバキア派遣の「ズデネク・ムリナーシ」がいた。ゴルバチョフと同じゼミナールグループに所属した法科の学生であった。ゴルバチョフは熱烈な共産主義者ムリナーシと親しく交際し、勉学に見物に常に行動を共にし、学生結婚の相手も共通の友人であった。外国人との接触に厳しい監視があった。にもかかわらず、ゴルバチョフはムリナーシを信頼して、政治・経済・社会生活全般についての個人的見解を打明けていた。学生時代のゴルバチョフの政治思想の情報はほとんどムリナーシがゴルバチョフと交した会話の回想によって伺い知ることができる。

ムリナーシはチェコに帰国後、チェコ共産党中央委員会のメンバーになった。1968年の「プラハの春」ではドプチェクを指導者とする改革派と運命を共にした。ソ連軍戦車がチェコの改革運動を粉砕した時、追放の憂き目に逢い、77年にはオーストリアに亡命しウィーンで研究所を主宰している。彼の回想記「夜寒」が78年に出版された。モスクワ大学の五年間の学生生活がそれによって明らかにされており、特にゴルバチョフとの交友を通して

得たゴルバチョフの政治思想に関する情報が興味をひく。西側のゴルバチョフを語る人びとはムリナーシの回想録によるところが多い。

モスクワ大学法学部の建物は当時は都心部のカール・マルクス大通りにある革命前の列柱のある建物であった。(現在のモスクワ大学は郊外のレーニン丘に聳える34階建の豪壮な建物である。)ここに週6日通い、午前9時始業午後3時まで講義・ゼミナールをうけ、図書館での調べもの、研究などの長い時間を費すのが日課であった。出欠が厳しく、然るべき理由のない欠席は奨学金の停止、ひどければ大学追放の原因になった。学業・素行の優秀なるものには学生が特に必要とする金銭面の援助が与えられた。ゴルバチョフはスターリン奨学金が与えられていた。これが彼の生活の基本を支えていた。学業評価は5, 4, 3, 2, 1で評価されたが4以下にさがると奨学金が打ち切られるのでゴルバチョフは猛烈に頑張ったようである。

学生生活の根拠となる宿舍は、地下鉄でモスクワ北東部にあるストロミンカ寄宿舍であった。古い建物で最初の建物はピョートル大帝(1672—1725)時代にさかのぼる兵舎であった。学生村と呼ばれたこの建物には1万人の学生であふれかえっていた。環境はひどく劣悪だった。一部屋に7人から16人が入ったという。日本の軍隊の内務班を思わせる。各階に共同の台所と洗濯場がひとつ、それにトイレがあったが、浴場はなかった。ゴルバチョフらは月に2度公衆浴場に通って身体の清潔を保ったという。質素な部屋には装飾は一切なく私物はベッドの下のスーツケースに入れた。プライバシー皆無の部屋であった。女子学生は同じ建物内だが部屋は別だった。男女学生が同じ階にいることが少し雰囲気や和らげたようだ。宿舍の大ホールの文化クラブが憩いの場であった。毎晩のように映画、講演、その他の催しが開かれていた。学生の最大の娯楽はアメリカ映画であった。ただし、アメリカは敵であったので何処の国の映画か、監督は誰れか、俳優が誰なのか、説明は一切なく、観客には絶対に知らされなかったという。タイトルそのものが写し出されず、これは外国映画ですと説明があっただけだったと回想する当時の学生の証言がある。

学生たちの文句なしの御気に入り映画は、ワイズ・ミューラー演ずるターザンだったという。寄宿舍で上映されるたびに学生は熱狂し、終ると若いソ連ターザンたちの雄たけびがこだまするのが常だったという。

奨学金200~300ルーブルは食糧など必需品を買うのもかつかつで、ゴルバチョフは一年中2着のズボンを交互に使用しカギ裂きを作ってもそのままだったという。食事はお茶でさえ高価だったので買えない学生は砂糖入りお湯の「学生茶」と黒パンで済ませて大学へ行った。講義のあと学部内のカフェテリアでとる食事は一日で唯一のまともなものであった。カフェテリアの椅子は150、常に満席だった。食事は単に食べることが可能というだけ

の代物でカーシャというソバ粉の薄ガユといった一種類だけのものであった（ムリナーシの回想による）。戦勝国のソ連が1950年代にまだこのような状況であったらしい。日本の敗戦後の大学生活も似たようなものであったが、これほどひどくはなかった。まして朝鮮戦争が始まってからは余程ましな食生活だった。

#### 4 ゴルバチョフは法学部で何を学んだか

ソ連のすべての人文科学コースではマルクスレーニン主義のソ連イデオロギーが必修であった。弁証法、史的唯物論、政治経済学、マルクス、エンゲルス、レーニン、スターリンの諸著作についての講義とゼミナールがあった。マルクス・レーニン主義イデオロギーはソ連の国家構造、したがってソ連法を正当化する中心理論であり法学部講義の中核であった。経典と同じように原著の厳密な注釈が教授された。学生は成績を良くするためにも必修を求められているマルクス信仰に口先だけでも忠誠を誓った。だが絶えず聞かされているとその影響は一生残るものである。ましてゴルバチョフは少年の頃からの確信的な共産主義者として入学して、マルクス・レーニン主義的立論を講義でたたきこまれたので、彼の信念に理論を与え、精神的核となった。ゴルバチョフはレーニンを学び、その才能だけでなく、卓越した知的戦略戦術家として傾倒した。レーニンが十月革命の敵対者メンシエヴィキのユーリー・マルトフに対する比較的人情味のある扱いをした点をスターリンのやり方と比較して評価するとムリナーシに語ったという。52年にモスクワ大学で教えていたソ連正史は上部党機関から指示された方針に反対する者はすべて「反党的逸脱者」で収容所暮らしか、死を意味していた。その名は歴史から抹殺された。そのようなスターリン主義のさ中でゴルバチョフは「それでもレーニンはマルトフを逮捕せず国外亡命を許した」と異端の説を語ったという。

法科ではマルクス・レーニン主義の完璧な知識を要求されるほか、ソ連法だけでなく革命前の法律も扱い、世界における法一般の理解に欠かせない問題も教えた。ソ連法の科目にはA・ピオントフスキー、V・メンシャギン教授共著の「ソヴィエト刑法教程」もあった。この本は30年代、スターリン肅正時の見せ物裁判を社会主義的適法性の範例としていた。自白を有罪・無罪の試金石とするソ連法学界のビシンスキー路線はソ連法教授の間でさえ追従するものばかりでなく、異端政治論は用心して絶対に口に出さなかったが、刑法の定義と論評では冷徹にプロ根性を維持した教授もあり、ゴルバチョフは相対的解釈があるという知的な訓練をうけたようである。

ゴルバチョフをしてさらに広い学問の世界に目を開かせた講義やゼミナールがあった。法学部は国家についての概念の根本を研究することを許された唯一の学部であった。他学

部の学生の耳目には決して触れることのないものを聞いたり、読んだりした。ローマ法、法制史、国際法、雇用法などあり、学生は、ハンムラビ法典から現代までの一般憲法、政治思想の変遷、マキャベリの「フィレンツェの歴史」、トーマス・アクイナス、ホッブズ、ヘーゲル、ルソー等の諸著作、そしてアメリカ憲法さえ論じあった。ゴルバチョフはラテン語の習得にも努力した。講義の教授の多くは革命前からの生き残りで、政治と全く没交渉であり、大戦、粛正その他のソ連生活の障壁を乗り越え、学究と教育の生活に専念していた。その多くは一流の優れた学者で優れた教育者であった。政治思想史の二年過程は週4時間の講義と4時間の個別指導であった。ステファン・ケチェキャン教授の講義はスターリン主義思想の彼方に以前から存在し続ける知的・政治的世界があることを学生に教えた。教授の学生時代は革命以前でありスターリン後期の独断的な弁証法などから自由な精神の力を学生に伝えた。講義は法学部講義中の圧巻で素晴らしい教師として人気も高く、ゴルバチョフはこうした別の政治思想に感銘を受けたという。ゴルバチョフの知的発見の喜びはケチェキャン教授のヘーゲルの講義が特に印象深かったらしく、ヘーゲルの「真理は常に具体的である」という格言に心打たれたとムリナーシに語ったという。ゴルバチョフは学生や教師が一般原則のおしゃべりばかりして、これが現実生活とどれだけかわりがあるかを無視している場合に、このヘーゲルの言葉を述べて批判した。マルクス主義理論は暗記すべき公理でなく、世界理解の手段であった。マルクスが学んだ先人の諸著作はソ連では検閲されなかったのでマルクス以前の著作の講義は一般に優れていた。アメリカの憲法はその素晴らしい条文がアメリカの現実生活の中で蹂躪されていると一応教授たちは断ったものの前向きな評価であったという。

ムリナーシの回想によれば、ゴルバチョフはソ連国内のプロパガンダのばかばかしさに心底から憤慨していたという。集団農協の体験をもつゴルバチョフは毎日のソ連紙に載る地方生活の話に疑惑を感じた。テーブルの上の素晴らしい御馳走の山をにこやかな農民が取り囲んでいる写真を見て、北コーカサス地方の栄養不足の現実生活と較べて、こんなじゃないとムリナーシに語ったという。

ある日年長の復員学生が自分の眼で実際に見たチェコスロバキアの田舎の家屋がソ連のように粘土や材木でなく、煉瓦でできており、屋根はソ連のように藁ぶきでなく瓦で葺いてあることを話した。自分の生れ故郷の集団農場のことしか知らず、モスクワへ出てきた学生たちにとっては信じられず論争したことがあった。チェコ留学生ムリナーシの証言があってもなお疑いをもっていったという。ゴルバチョフは大学生活の中で世界と政治の実体に眼をひらかされるようになる。

ゴルバチョフは1955年2月23歳、ライサ・マクシモブナ・チトレンコと学生結婚をした。

ライサ夫人はモスクワ大学哲学科で学んでいた。多くの学生の羨望の的になる美人だった。多くのエピソードがあるが略す。この年6月大学を優等の成績で卒業するが、法律専門職に進まず、故郷のコムソモール・スタブロポリ地方委員会の情報宣伝部次長として働き政治家への道を歩くことになった。その後党組織の階段を駆け上り第八代の書記長の座を射止めることになった。

(ゴルバチョフの大学におけるコムソモール活動は省略した。ちなみに彼は1952年10月共産党に入党が認められた。)